

田丸先生の追憶

寺田寅彦

青空文庫

なくなつてまもない人の追憶を書くのはいろいろの意味で困難なものである。第一には、時のパースペクティヴとでもいうのか、近いほうの事からの印象が遠い以前のそれを掩^{えんさ}散^{さん}したがる傾向がある。第二には、近いほうの事を書くとうると自然現在の環境の中でのいろいろの当たりさわりが生じやすい。第三には、いったいそういうものを書くかうというような気持ちにもなりにくいものである、いかにも心ないわざだという気がするのである。それで田丸^{たまる}先生の場合にしても、なくなれてまもない今日、こんなものを書く気になりかねるのではあるが、理学部会編集委員のたつての勧誘によつて、ほんの少しばかり自分の高等学校時代の思い出を主にして書いてみることにした。

明治二十九年の秋熊^{くまもと}本高等学校に入学してすぐに教わつた三^{トリ}角^{ゴノメトリ}術^リの先生がすなわち当時の若い田丸先生であつた。トドハンターの本を教科書として使つていた。いちばん最初に試験をしたときの問題が、別にむつかしいはずはなかつたのであるが、中学校の三角の問題のような、公式へはめればすぐできる種類のものでなくて、「吟味」といったような少しねつい種類の問題であつたので、みんなすっかり面食らつて、きれいに失敗してしまつて、ほとんどだれも満足にできたものはなかつた。その次の時間に先生が教壇に

現われて、この悲しむべき事実を報告されたのであったが、その時の先生は実にがっかりしたような困り切ったような悲痛な顔をしておられた。あんなやさしい問題ができないのは実に不思議だと言われるのであった。生徒一同もすっかりしよげてしまい恐縮してしまつたのであったが、とにかくもう一ぺん試験のやり直しをすることになり、今度は普通の中学校式の問題であつたから、みんなどうにか及第点をとって、それで事は落着いたのであつた。

たしか二年のときであつたと思うが、ある日、運動会のあつた翌日だからというので、先生がたに交渉して休みにしてもらおうとした。ほかの先生はだいたい休みということになつたが、物理の受け持ちの田丸先生はなかなか容易に承諾を与えられなかった。そこで生徒のほうで勝手に休むことに相談一決してみんなで失敬してしまつたものである。先生が教場へはいってみるとそこにはたった一人、まじめで勉強家で有名な何某一人のほかにだれもいなかった。その翌日になると一同で物理の講堂へ呼び出されて、当然の譴責けんせきを受けなければならなかった。その時の先生の悲痛な真剣な顔を今でもあり思い出すことができるような気がする。それが生徒に腹を立ててどなりつけるのではなくて、いったいどうして生徒がそういう不都合をあえてするかということに関する反省と自責を基調

とする合理的な訓戒であつたのだから、元来始めから悪いにきまつている生徒らは、針でさされた風船玉のように小さくなつてしまった。化学のK先生がそばにいて取り成しの役を勤められたのにお任せしてとにかく一同で謝罪と謹慎の意を表してゆるしてもらうことになつたのである。

われわれの在学中田丸先生はほとんど一度も欠勤されなかつたような気がする。当時一方には、日曜の翌日、すなわち月曜日という三度に一度は必ず欠勤するという先生もいたので、田丸先生の精勤はかなり有名であつた。

ある時熊^{くまもと}本の町を散歩している先生の姿を見かけた記憶がある。なんでも袖^{そで}の短い綿服にもめん袴^{ばかま}を^はいて、朴^ほ齒^{おば}の下駄^{げた}、握り太のステッキといったようないで立ちで、言わば明治初年のいわゆる「書生」のような格好をしておられた。そうして妙な頭巾^{ずきん}のような風変わりの帽子をかぶつておられたような気がする。とにかく他の先生がたに比べてよほど書生っぽい質素で無骨な様子をしておられたことはたしかである。

まじめで、正直で、親切で、それで頭が非常によくて講義が明快だから評判の悪いはずはなかつた。しかし茶目気分横^{おう}溢^{いつ}していてむつかしい学科はなんでもきらいだという悪太郎どもにとっては、先生の勤勉と、正確というよりも先生の教える学問のむつかしさが

少なからず煙たくもあつたらしい。当時、アメリカの民謡の曲を取った「ヒラ／＼と連隊旗」という唱歌があつたが、それを、もう一ぺんもじつてこしらえたパロディーの戯歌がはやっていた。その歌詞の中には、先生の名も他の多くの先生がたと一度に槍玉^{やりだま}にあげられていた。そうして「いざあばれ、あばあれ」というのがこの愉快な歌のリフレインになっていたのである。

第二学年の学年試験の終わったあとで、その時代にはほとんど常習となっていたように、試験をしくじった同郷同窓のために、先生がたの私宅へ押しかけて「点をもらう」ための運動委員が選ばれた時、自分もその一員にされてしまった。そうしてそのためにもう一人の委員と連れ立って始めて田丸先生の下宿を尋ねた。当時先生の宿は西子飼橋^{にしこがいばし}という橋の近くで、前記の化学のK先生と同宿しておられた。厳格な先生のところへ、そういう不届き千万な要求を持ち込むのだから心細い。しかられる覚悟をきめて勇気をふるって出かけて行つたが、先生は存外にこうしたわれわれの勝手な申しぶんをとにかくも聞き取られた。しかしもちろんそんなことを問題にはされるはずがなかった。その要件の話がすんだあとで、いろいろ雑談をしているうちに、どういうきっかけであつたか、先生が次の間からヴァイオリンを持ち出して来られた。まずその物理的機構について説明された後に、デ

モンストレーシヨンのために「君が代」を一ぺんひいて聞かされた。田舎者の自分^{いなかもの}は、その時生まれて始めてヴァイオリンという楽器を実見し、始めて、その特殊な音色を聞いたのであった。これは物理教室所蔵の教授用標本としての楽器であつたのである。それから自分は、全く子供のように急にこの珍しい楽器のおもちやがほしくなったものである。そうして月々十一円ずつ郷里からもらっている学費のうちからひどい^{くめん}工面をして定価九円のヴァイオリンを買うに至るまでのいきさつがあつたのであるが、これは先生に関係のない余談であるからここには略する。とにかく自分がこの楽器をいじるようになったのもその動機は田丸先生に「点をもらい」に行つた日に発生したのである。ずっと後に先生が留学から帰つて東京に住まわれるようになってから、ある時期の間は、ずいぶん頻^{ひんぱん}繁に先生のお宅へ押しかけて行つて先生のピアノの伴奏で自己流の演奏、しかもファースト・ポジションばかりの名曲演奏を試みたのであったが、これには上記のような古い因縁があつたのである。

高等学校における田丸先生の物理も実に理想的の名講義であつたと思う。後に理科大学物理学の課目として教わつたものが「物理学」だとすると、その基礎になるべき「物理そのもの」とでもいったようなものを、高等学校在学中に田丸先生からみっちり教わつた

というような気がする。この時に教わったものが、今日に至るまで実に頭にしみ込み実によく役に立ち、そうしていつでも自分の中で生きてはたらいっているのを感じる。高等学校の物理は実にだいじだと思う。

そのころ先生は時々物理の宿題を出して生徒一同から答案を徴し、そうしてそれを詳しく調べた上で一同を集めておいてその答案に対する丁寧な講評をされた。その宿題を解くのが自分には実に楽しみであった。いつか「月蝕げっしょくのときに、地球の半陰影ペナンプラが見えないのはなぜか」という問題が出た時、いろいろ考えたがよくわからず、結局何かだいたい無理なこじつけを書いて出した。さて、その講評の日に、順次に他の問題について説明された後に、この半陰影の問題に移った。「諸君の中にこういうことを書いた人がある」と言つて、自分の提出した答案の所説を述べ、「これは、なかなかうまい説明であると思う。が」と言つてちらりと自分のほうを見ながら、にこにこして「しかし、惜しい事には……」と言つてその似而非説明えせせつめいの大きなごまかしの穴を指摘しておいて、さて、丁寧に先生の本物の説明を展開するのであった。自分はすっかり赤面し恐縮してしまった。三十余年後の今日でもはつきりその時の事を覚えていくくらい恥ずかしかったのである。先生もなかなか人の悪いところがあつたという気がする。もつとも相手はやつと二十歳の子供であつ

たのだから、ちよつとからかつてみる気にもなられたものであろう。

先生に三角を教わり力学を教わつたために、始めて数学というものがおもしろいものだということが少しばかりわかつて来た。中学で教わつた数学は、三角でも代数でも、いつたいどこがおもしろいのかちつともわからなかつたが、田丸先生に教わつてみると中学で習つたものとはまるでちがつたもののように思われて来た。先生に言わせると、数学ほど簡単明瞭めいりようなものではなくて、だれでも正直に正當にやりさえすれば、必ずできるにきまつているものだといふのである。教科書の問題を解くのも、おみくじなんかを引くように、できるもできないのも運次第のものであるかのように思つていた自分のような生徒たちには、先生のこの説は実に驚くべき天啓であり福音であつた。なるほど少なくとも書物にあるほどの問題なら、その書物で教えられた筋道どおり正直にやれば必ずできるのであつた。そういうことを発見して驚いたものである。

自分は中学五年時代には将来物理をやりたいと思つてひとりできめていた。中学校の先生の中には、ぜひ心理学をやれとすすめる先生もあつた。しかし父がいろいろの理由から工科をやることを主張したので、そのころ前途有望とされていた造船学をやることになり、自分もそのつもりになつて高等学校へはいつた。ネーヴァル・アンニユアルなどを取り寄

せていろいろな軍艦の型を覚えたり、水雷艇や魚形水雷の構造を研究したりしていたのであるが、一方ではどうにも製図というものにさっぱり興味が無いのと、また一方では田丸先生の物理の講義を聞き、実験を見せられたりしていると、どうしても性に合わぬ造船などよりも、物理のほかに自分のやる学問はないという気がして来た。それでとうとう田丸先生に相談を持ち掛けたところが、先生も、それなら物理をやったほうがよからうと賛成の意を表してくださった。少なくとも、そういうふうにしてその時の先生の話を了解したので、急に優勢な援兵を得たように勇気を増して、夏休みに帰省した時にとうとう父を説き伏せ、そうして三年生になると同時に理科に鞍くちがえをしたのである。それがために後日できそこないの汽船をこしらえて恥をかくであろうことの厄やくうん運を免れた代わりに、将来下手な物理をこね回しては物笑いの種をまくべき運命がその時に確定してしまったわけである。しかし先生にその責任をもって行くわけでは毛頭ない。それどころか、造船をやらずに物理をやったことを後悔したことは三十余年の間に一度もなかったのである。

自分が高等学校を出た後まもなく先生は京都大学、ついで東京大学に移られ、それから留学に出かけられた。帰朝後いよいよ東京へ落ち着かれたころは、西片町にしかたまちへんにしばらくおられて、それから曙あけぼのちよう町へ生涯しょうがいの住居を定められた。自分はそここいしか小石

わはらまち

川原町 にいて曙町には近いものだから、時々ヴァイオリンをさげて行つては先生のピアノのお相手をした。そのヴァイオリンはもはや昔の九円ではなかったのである。先生はよくシューベルトの歌曲を歌つて聞かせられたが、お得意のレペルトアルは、「Strandchen, Am Meer, Im Dorfe, Doppelgänger, Erlkönig, Leiermann, Lindenbaum etc.」であつた。それから Reissiger の Zwei Grenadier とか Die Uhr などよく歌われたものである。いつかのニュートン祭にやはりこの「エルケーニヒ」か何か歌われたことがあると思うが、そういうときでも先生は、「要するに、やるといふ事がハウプトザツヘだから……」と言つて、決して巧拙のできばえなどは問題にされなかつた。

酒も煙草たばこも甘いものもいっさいの官能的享樂を顧みなかつた先生は、謡曲でも西洋音楽でも決してそれがただの享樂のためではなくて、やるよことが善いことだからやるのだというように見えた。休日きふに近郊などへ散歩に出かけられるのでも、やはり同様な見地からであつたように自分には思われる。

下手へたな論文を書いて見ていただくと、実に綿密に英語の訂正はもちろん、内容の枝葉の点に至るまで徹底的に修正されるのであつた。一度鉛筆で直したのを、あとで、インキでちゃんと書き入れて、そうして最後に消しゴムですっかり鉛筆を消し取つて、そのちりを

払うことまで先生がやられるので、こっちはかえってすっかり恐縮してしまつて、「私やりますから」と言つても、平氣ですみからすみまで手を入れ、おしまいまで自身の手できれいにやつてしまわないと氣がすまないというふうであつた。そういう時にいつも言われた「とにかく、ちゃんとしておかなかちや」という先生の言葉は、いろいろの場合にいつもよく聞かされ耳の奥にしみ込んで忘れられないものである。いかなる事がらでも「ちやんとして」おかなければ決して済まされなかつた。残らずさし合わせた釘一本のわずかなゆるみでも決して見のがし捨ててはおかれなかつたのである。

先生のノートや原稿を見るときれいな細字で紙面のすみからすみまでぎっしり詰まつていて、「余白」というものがほとんどなかつたようである。

しかし先生は、「むだ」や「余白」だらけのだらしない弟子たち^{でし}に対して、眞の慈父のような寛容をもつて臨み、そうしてどこまでも懇切にめんどろを見てやるのに少しも骨身を惜しまれなかつたように見える。自分がだらしがなくて、人には正確を要求する十人並みの人間のすることとは全く反対であつたのである。

先生が、もう少しだらしない凡人であつてくれたら、そうしたらおそらくもう少し長生きをされて、そうしてもう少し長く後進のためにもめんどろを見てくださることができ、

また先生としてももう少しのどかな生しょうがい涯を送られたではないかという気がすることもある。しかしそれは結局だらしない人間の言うことで、先生は先生としての最も意義ある最も充実した生涯を完成されたのであろう。

こうして書き出してみると、先生の思い出はあとからあとから数限りもなく出て来るのであるが、この機会にはやはりこれくらいにして筆をおいたほうが適当であろうと思う。

記憶違いのために事実相違の点もいろいろあるかもしれない。それについては読者の寛容を願いたいと思う。

先生がかりに再生されて、この追憶を読まれたら、と想像してみる。先生はやっぱりにここにこして、何か一言ぐらい鋭いリマークをされて、そうして、それきりでゆるしてくださるであろうという気がするのである。

（昭和七年十二月、理学部会誌）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第三卷」岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年4月16日第20刷改版発行

1993（平成5）年2月5日第59刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年2月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田丸先生の追憶

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>